

『狭衣物語諸本集成 第三卷 伝慈鎮筆本』翻刻本文補正

△調査報告▽

『狭衣物語諸本集成 第三卷 伝慈鎮筆本』翻刻本文補正

神戸松蔭狭衣研究会

片岡 利博

石田 まゆ

高見紀理子

田中佐代子

田中 まき

西臺 薫

伝慈鎮筆本狭衣（以下、「慈鎮本」と略称する）四巻は、狭衣物語を研究する者にとって必要不可欠な、きわめて重要なテキストである。慈鎮本は、平成七年十月に『狭衣物語諸本集成 第三巻』（笠間書院刊。以下『諸本集成』と略称する）に収められて公開されたが、これにより、従来の狭衣物語研究の成果の多くが大々的な修正を迫られることになった。それほどに、この本の公開は衝撃的だったのである。もっと早い時期にこの本が紹介されていたら、と思わずにはいられない。今日、慈鎮本を見ないで狭衣物語を論じることは、無謀としかいようがないであろう。それほどに、この本は狭衣物語研究において大きな発言力をもつ。また、狭衣物語研究のみならず、物語一般の本文のありようについて考えようとする場合にも、この写本の存在は軽視しえないものになってゆくであろうと思われる。本学卒業生有志による神戸松蔭狭衣研究会は、当初、為家本を底本にして狭衣物語の講読をおこなっていたが、急

文林 四十五号

遽、この慈鎮本を用いて初めから読み直すこととし、数種の主要な諸本と比較しつつ物語を読みすすめ、この正月に、ようやく全巻を読了した。研究会では毎回さまざまな新発見があり、そこで得られた知見は、研究会メンバーたちが発表した種々の論文に反映されている。

しかしながら、慈鎮本を読み進めていく際に常に悩ましい思いをしたのは、これが活字翻刻の形でしか提供されていないことであった。『諸本集成』のテキストは、初めの数ページを見ただけでも分かるように、文意の通じない箇所があまりにも多い。しかも、その多くは、翻刻ミス疑いたくなる類いのものなのであった。研究会メンバーは、毎回、口癖のように、「この翻刻はほんとうに正しいのだろうか」と言い合ったものである。

なんとか原本にあたって確かめたい、と思いつつ、なかなか実現しなかった願いが、平成二十二年にようやく叶った。慈鎮本は、現在、大阪青山歴史文化博物館の所蔵となっているが、かつて本学院教員であった片桐洋一先生の仲介により、塩川和子館長から特別閲覧のお許しをいただくことができたのである。研究会メンバーは、二月二十・二十一日の二日にわたって大阪青山歴史文化博物館へ出向き、『諸本集成』の翻刻の不審箇所を調査した。調査の時間が限られていて、全文を総点検することはとうていできないので、あらかじめ、翻刻ミスが疑われる不審箇所を抜き出しておき、その箇所だけを点検するという方法を採用することとした。点検箇所は、巻一：二八三箇所、巻二：三四一箇所、巻三：四四八箇所、巻四：五六五箇所、計一六三七箇所に及ぶ。

調査の結果、翻刻ミスはほとんどないことが判明した。これは予想外の結果であった。文意の通らない箇所のほとんどは、たしかに、翻刻どおりの、意味の通らない文字列がならんでいたのである。

『狭衣物語諸本集成 第三卷 伝慈鎮筆本』翻刻本文補正

ただし、今回の調査によって判明したことのひとつは、『諸本集成』の翻刻が、意が通じるかどうかということに斟酌しない翻刻であったということである。たとえば、「まめたせ給へば」であれば難なく通じる箇所が、翻刻では「まめたらせ給へハ」（巻一・一八〇12行目）となっている。原本を見てみると、たしかに「まめたらせ給へハ」と読める。しかし、読みようによっては「まめたせ給へハ」と読めなくはないのである。おそらく、『諸本集成』は、意が通じるかどうかということとは別の、しかるべき判断基準によってここをあえて「ら」と読んだのであろうが、『諸本集成』のその判断基準が慈鎮本を読み解きづらいテキストにしている原因のひとつである、ということはいえる。本稿は、調査の結果判明したそういう箇所を、若干の翻刻ミスと合わせて、とりあえず報告しておこうとするものである。

「つ」と「へ」、「ころ」と「こゝろ」についても、同様のことがいえる。「つ」「ころ」とありさえすれば文意の通じる箇所が、『諸本集成』の翻刻では「へ」「こゝろ」になっていたり、その逆であったりする箇所がかなり多くある。当該箇所は、原本で確かめてみても、字形によって両者を区別することはほとんど不可能なように思われた。「つ」と「へ」、「ころ」と「こゝろ」の例は逐一あげていくときりがないので、『諸本集成』の翻刻を尊重して本稿では採り上げないこととしたが、『諸本集成』の翻刻が「へ」「こゝろ」となっている場合、「つ」「ころ」と読むことが可能である。逆も、また、しかりである。

とはいえ、こうして原本にあたって見たあとも、不審箇所の大半はやはり文意が通らないまま残ってしまう。ということは、とりもなおさず、慈鎮本という本自体が文意を通すことに無頓着なテキストである、ということになる。

文林 四十五号

『諸本集成』の冒頭に掲載された口絵写真をみてもわかるように、慈鎮本はけっして雑な写し方をされた本ではない。むしろ、非常に丁寧な書写され、丁寧な扱いを受けて伝えられてきたように見受けられるが、にもかかわらず、意の通じない箇所が千数百箇所もあるという事実を、どのように考えればよいのであろうか。

慈鎮本の書写態度についての考察は、われわれ研究会メンバーの力量をこえており、書誌に精通した諸賢によるさらなる精査をまたねばならないが、たとえば、次のようなことが考えられはしないであろうか。『諸本集成』に付載された写真でもわかるように、巻一の四丁オモテ12行目の最初の文字は、「を」としか読めない。しかし、ここは「は」とあるべきところであって、「を」では意味をなさない。にもかかわらず、慈鎮本が明確に「を」と書いているのは、慈鎮本の親本が、「は」の仮名を、「を」と読めるような字形に書いていたからであろう。文意を通すことに無頓着な慈鎮本の筆者は、見えたとおりに「を」と読んで、「を」と書いた。結果としては、慈鎮本筆者の誤読・誤写ということになるわけであるが、その原因の多くは慈鎮本の親本の字体にあったのではないだろうか。下の一覽表にあがっていない箇所の中に、同様の推測をしなくなるようなケースが甚だ多くある、ということを言い添えておきたいと思う。

狭衣物語研究における慈鎮本の重要性を思えば、一刻も早く影印が公刊されることを期さずにはいられないが、当面、その予定はない、とのことである。今しばらくは、やはり『諸本集成』の翻刻を最大限に活用するしかない。こうした状況のもと、本稿は、わずかながら資するところもあろうかと思う。

ちなみに、国文学研究資料館には慈鎮本の紙焼写真が収蔵されており、閲覧にも供されているようである(『物語

『狭衣物語諸本集成 第三巻 伝慈鎮筆本』翻刻本文補正

翻刻の補正箇所一覧

【巻一】

丁	行	翻刻本文	補正本文	備考
三ウ	2	こかるさま	こかるゝさま	「ゝ」がある
一五オ	6	せんまうとの	せんようとの	「ま」ではなく、「よ」
一七ウ	2	すゑの	すゑゝの	「ゝ」があるようにみえる
一七ウ	10	うとみさせ	うらみさせ	「ら」とよめる
一八オ	12	まめたらせ	まめたゝせ	「ゝ」によめる
二〇ウ	1	きみをゝしミ	きみをしみ	「ゝ」はないようにみえる
三〇オ	12	こゝろし給て	こゝちし給て	「ち」とよめる
三三ウ	12	人ととしめ	人をとしめ	「を」とよめる
五二オ	6	はるく	はなく	「な」ともよめる

* * *

の生成と受容③』国文学研究資料館・平成19年度 研究成果報告 八六頁)。加藤昌嘉氏の御教示によれば、慈鎮本が吉田幸一氏のもとにあったところ、『諸本集成』の翻刻作業用に作成されたものであるらしい。

文林 四十五号

【巻二】

五七ウ	五四ウ	五三オ	四三ウ	三七オ	三四ウ	三二ウ	二九オ	二〇オ	六オ	五ウ
8	12	7	13	4	5	9	6	13	9	11
ありしかハ	つらうと	おはしまさらん	あかせよ	あるな	すこしの	人もしれす	そのえんも	おほしこかるゝ	ほしめさるれ	はやかり給
ありしにハ	つらうと	おはしまさゝん	あらせよ	あるな	すゝしの	人もしれす	そのひんも	おほしこかるゝに	おほしめされる	はやり給
「に」とよめる	「と」はミセケチのようにみえる	「ゝ」のようにもみえる	「ら」とよめる	「な」はミセケチのようにみえる	「ゝ」ともよめる	「も」はミセケチになっている	「ひ」ともよめる	「に」がある	「お」がある	「か」はないようにみえる

六九ウ	六七ウ	六〇ウ
6	11	10
あれかちも	しつくし	かうまへ
あれかにも	しつへし	かうさへ
「に」とよめる	「へ」とよめる	「さ」とよめる

『狭衣物語諸本集成 第三卷 伝慈鎮筆本』翻刻本文補正

【卷三】

三二ウ	三〇オ	一九ウ	一四オ	一一オ	九オ	八オ
8	11	5	2	12	8	12
うちとけことも	いねて	かなてをく	御かへり	思ひつゝける	いさらせ給へ	むつれ給にさま
うちとけことゝも	いるて	かなてをく	御かへり	思ひつゝかゝる	いさゝせ給へ	むつれ給ふさま
「ゝ」がある	「ゐ」によめる	「く」によめる	「ハ」ともよめる	「かゝ」ともよめる	「ゝ」ともよめる	「ふ」とよめる

九五オ	九二ウ	九二ウ	八四ウ	六六オ	六五オ
6	11	10	6	13	6
ましらひほと	しるしは	給いて	こそかと	いまいりて	ゝもりなき
ましらひのほと	しるしは	給はて	こそハと	まいりて	くもりなき
「の」がある	「ゐ」ともよめる	「ハ」とよめる	「ハ」とよめる	「い」はない	「く」とよめる

一一六ウ	一一四オ	一〇四オ	一〇三ウ	九九オ	九七ウ	九一オ	七七ウ	六九ウ	六七ウ	六六ウ	六六オ	四三オ	三八ウ
6	9	12	6	1	8	4	6	4	13	13	10	12	9
かはかり	こゝち	なから	なかうましき	かはかり	とりわきた給	ミのなんやう	いそて	ことなり	しらぬ	きえくしき	なかめせし給	つく人の	おほしませ
かはり	こゝら	なかくら	なからうましき	かはり	とりわき給	ミのなんやう	いかてorいそ	ことなり	しぬ	きらくしき	なかめをし給	つく人の	おハしませ
「か」はないようにみえる	「ら」ともよめる	「ゝ」があるようにみえる	「ら」があるようにみえる	「か」はないようにみえる	「た」はない	「ら」があるようにみえる	「いそて」とはよめない	「の」がある	「ら」はない	「ら」とよめる	「を」とよめる	「く」とよめる	「ハ」とよめる

『狭衣物語諸本集成 第三卷 伝慈鎮筆本』翻刻本文補正

【卷四】

一三 七ウ	2	なるらん	なからん	「か」とよめる
一〇 六ウ	7	のとくしき	かとくしき	「か」とよめる
一〇 二ウ	13	ことも	とも	「こ」はない
七九 オ	10	しめんなるかう	しめんなるらう	「ら」ともよめる
七二 オ	10	いと	いと	「ゝ」がある
五三 ウ	6	給へ	給へ	「へ」はミセケチになっている
一オ	10	おもし	おほし	「ほ」とよめる

付記

慈鎮本のミセケチ箇所は『諸本集成』にも表示されているが、原本に補入の形で書かれている本文のほとんどは本行中に組み入れて翻刻されている。今回、調査にあたってはじめて判明したことであり、正確な記録をとりきれなかったため、本稿ではすべて割愛せざるをえなかったが、慈鎮本の書写のありようを考える際には無視されるべきではないであろう。

慈鎮本の調査に際し、小倉嘉夫氏には終始こまやかな御配慮を賜った。厚く御礼申し上げます。

